

ドメニコ・スカルラッティの鍵盤ソナタに関する資料の比較研究
—K.43からK.96までの筆写譜を中心に—

原 田 宏 司

Manuscript Copies of Keyboard Sonatas of Domenico Scarlatti
—Mainly on manuscripts of K.43 to K.96—

Hiroshi Harada

In a previous study I examined and compared textual details of K.1 to K.147 as found in manuscripts and printed scores, and then ordered the source material to arrive at a preliminary genealogy of the textual tradition. This time I have, however, placed greater emphasis on manuscripts, the Venice, the Parma, the Münster, the Coimbra, the London31553, the Cambridge13, of K43 to K96.

As regards methodology, I first checked in detail the dissimilarities in six manuscripts, and looking at the way originated, I was able to detect three different levels of discrepancy. The first one comprises mistakes inadvertently made by the copyists and reflects small differences in pitch and rhythm in the scores. The second level deals with variants in time signatures, tone symbols, musical terminology and differences of content in some particular sections. They obviously reveal a different frame of mind in the composer and make us postulate original works that are at variance with one another. The third level is concerned with variants that must be considered secondary in character, such as supplementary notation, ornamental notes, pauses, etc., something that portrays a subjective side in the notations of the copyist, reflecting his musical upbringing and mannerisms.

キーワード

ドメニコ・スカルラッティ Domenico Scarlatti, 鍵盤ソナタ Keyboard sonatas, 18世紀の筆写譜
Manuscripts of 18th century, 比較研究 Comparative study

所属

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University

学芸学部 Faculty of Arts and Sciences 子ども学科 Department of Childhood Studies

1 はじめに (問題の所在)

ドメニコ・スカルラッティ (1685–1757) は、同年に生まれた J. S. バッハやヘンデルに比較すると、きわめて謎に満ちた作曲家である。前半生を生地イタリアで過ごし、囑望されるポストに就きながら、後半生では突如ポルトガルへ単身で渡り、王女マリア・バルバラの音楽教師を務めたばかりでなく、バルバラが王妃としてスペインに赴くと自らも随行し、その地で波乱の生涯を終えている。しかも、その間に作曲した555曲を上回る鍵盤ソナタは、1曲といえども自筆譜の形で残されているものはない。今日、スカルラッティが「近代鍵盤奏法の父」という愛称で呼ばれているのは、当時、彼の周辺にいた

コピスト達の手によって筆写された写本や当時の印刷譜を通して伝承されているにすぎないのである。

とは言え、現在明らかにされている18世紀に筆写された写本は22種類、印刷譜は33種類もある。この数字は当時の作曲家としては極端に多く、スカルラッティの鍵盤ソナタがいかに注目され、当時、幅広い需要層を獲得していたかを裏づけるものである。

これらの楽譜資料の中で、一次資料と見做されるものに、スカルラッティの生存中に作成された496曲を取めたヴェネチア写本 (全15巻) と463曲を取めたパルマ写本 (全15巻)、それに30曲からなる印刷譜《Essercici》がある。さらに二次資料として349曲を取めたミュンスター写本 (全5巻)、308曲を取めたヴィーン写本 (全7巻)、20世紀に発見さ

れた185曲を収めた新ヴィーン写本（全5巻）、その他大小諸々の筆写譜、印刷譜があって、楽譜資料に関しては比較的恵まれていると言っても過言ではない。しかし、個々の楽曲の記譜に関しては、同一の楽曲であっても完全に一致するものはほとんどなく、これが混乱を引き起こす大きな要因ともなっている。特に、ヴェネチア写本とパルマ写本はスカラッティの生存中にほぼ並行して作成されたにもかかわらず、内容は著しい相違を示している。スカラッティ研究者によっては、写本の装丁の豪華さや王家の紋章の挿入、曲数の多さなどから、ヴェネチア写本を最も信頼のおける写本とするものもあれば、ヴェネチア写本に含まれない楽曲を収めているパルマ写本の正当性を主張するものもいる。したがって、今日出版されている全集版と称するものは、ヴェネチア写本やパルマ写本のファクシミリ版か、それらに依拠した校訂版が多いのが現状である。さらに選集版に至っては、他版の詳細な情報を記載することはできても、その信頼すべき根拠を明示することがきわめて困難な状況にあるのが現状である。

本来、楽譜資料の研究は、すべての楽譜資料の厳正な資料批判を通して成立するものである。20世紀にゲッティンゲン（ドイツ）のバッハ研究所が文化政策の一環として新バッハ全集を刊行したが、それに裏付けられる楽譜資料の比較研究は、最も進んだ事例として挙げられるであろう。新バッハ全集では、原資料（Urquelle）が消失している場合、古典文献学で用いるテキスト批判の方法を用い、楽譜上の誤りを手がかりにして資料間の依存関係を明らかにする方法を採用している¹⁾。それには現存するすべての資料の親子関係を資料批判（recensio）によって明らかにし、資料の家系図（stemma）を作成して資料価値をみきわめることが前提となる。

D. スカルラッティの楽譜資料の研究においても、現在、最も必要とされているのは、18世紀に現れた筆写譜や印刷譜の資料批判による系譜づくりであり、それに基づく原資料の検討であると言っても過言ではない。筆者は、これまで5回に分けて、K.147までの筆写譜と印刷譜の比較検討を行ってきたが、次にこれまでの研究の経緯について簡潔に触れておきたい。

なお、スカラッティの鍵盤ソナタに関する資料は、資料伝承の立場から概観すると、1750年を境にして、事情の異なる二つの時期に分けられる。1750年以降では、作成年代をほぼ同じくするヴェネチア写本（第1巻～第13巻）とパルマ写本（第1巻～第15巻）を主軸として、比較的安定し秩序だった伝承が行われているのに対して、1750年以前では、多様な印刷譜や筆写譜が並存し、きわめて複雑な状況を呈している。

そこで本研究では、1750年までに出現した全ての資料に焦点を合わせ、それらの伝承関係を数回に分けて明らかにすることを主な目的とする。

2 研究の経過

筆者による最初の楽譜資料の比較研究では、K.1からK.30までを対象とした²⁾。この30曲は、スカラッティ自ら編集に携わったとされる《Essercici》（1738）そのものに該当するほか、10種類の筆写譜と10種類の印刷譜が全体、または一部分で重複している。それらの資料を相互に比較した結果、ファクシミリ版か厳密な複製版でない限り、同一内容の資料は存在せず、きわめて複雑な資料伝承を伴っていることが判明した。資料の相違現象とその要因を要約すれば、およそ次の二つのレベルに大別することができる。

第1のレベルはコピスト、あるいは編者の不注意による誤りで、記号の欠落や、音高、リズムの単純な書き誤りから、小節の脱落、似かよった音型を繰り返すようなミスまで含まれる。これらは無意識のうちに発生するケアレスミスで、コピストや編者の行為に主体性は見られない。第2のレベルは、相違の箇所が増大するばかりでなく規模も拡大し、音楽的意図を異にするもので、明らかに原本の相違から生ずると思われる場合である。

このほか各資料には、コピストや編者の趣味や癖が必ず反映する。例えば、前打音、装飾音、臨時記号、休符の記入に関しては、原本をそのまま受け継ぐことはむしろ稀である。これらは不規則的に現われるものものではなく、各資料のスタイルとして一貫して出現するもので、これらの要素は、資料伝承を検討する場合、除外して考えねばならないであろう。また、18世紀は、記譜のスタイルが古いタイプから新しいタイプへと移行する過渡期にあり、その意味でも資料の多様性は避けられないものである。コピストの意志が前面に出過ぎたり、版を重ねるにつれてますます誤りがエスカレートする現象は、解放的な印刷譜よりも閉鎖的な筆写譜に生じやすい。

テキストの比較考察の結果、譜面上の相違が著しくても、このような相違の相関性および相違発生に伴う要因にしたがって整理すれば、《Essecici》、クック版、ヴェネチア写本の三つを、きわめて重要な資料として絞ることができた。《Essecici》に最も近い版はヴィトフォーゲル版で、次いでミュンスター写本があげられる。ミュンスター写本と旧ヴィーン写本は類似性が高いが、後者ではより誤りが増幅される傾向にある。次いでクック版の流れをくむ資料は、再版であるジョンソン版とプレストン版、それにボアヴァン・グループの3種類の印刷譜である。

ヴェネチア写本は、他の資料とは明確に一線を画するもので、きわめて特異な存在である。ヴェネチア写本の5曲は、《Essecici》の出版に先立つものと考えられ、資料としては最も古いものと推測される。

次いで、K.31からK.42までの7種類の印刷譜とヴェネチア写本を中心に検討を行った³⁾。ここで問題とされるのは、《Essecici》の出版に刺激されてその翌年出版に踏み切ったロージングレイヴの編集によるクック版と5種類からなるボアヴァン・グループとの関係である。これに関しては、ボアヴァン・グループがクック版や《Essecici》に先行すると主張するホプキンソンとそれを否定するカークパトリックとシェヴェロフの対立がある⁴⁾。筆者は、既述の方法に基づいたテキストの比較考察から、後者の説と同じ結論に達した。ただし、ボアヴァン・グループの一部(V. III)に関しては、クック版よりもヴェネチア写本に共通する性格が強いと考えられる。

K.43からK.147までを対象にしたテキストの比較研究⁵⁾では、ヴェネチア写本とパルマ写本という二つの主要写本とミュンスター写本という副次的写本を対象にした。ここでも既述の二つの相違現象を尺度にして比較検討した結果、ヴェネチア写本とパルマ写本では、異なる原本から筆写されたものと想定できる箇所が多く、それも第14巻(1742)に集中していることが判明した。ミュンスター写本は両者の中間的存在であるが、パルマ写本のミスが相続、拡大する傾向にある。

このほか、これらの状況を補うものとして、わが国の南葵音楽文庫が所蔵する初期の印刷楽譜や、最近ウェールズ大学のボイド教授によって発見された新スペイン写本の比較考察を行った⁶⁾。

これらの情報を踏まえて、今回はK.43からK.94までの4種類の副次的写本と、2種類の主要写本を対象に検討することにした。

なお、スカルラッティの年代記については、これまでいくつかの試みがある。スカルラッティの鍵盤ソナタの全集を最初に手がけたのはA. ロンゴである⁷⁾。彼は1906年から1910年にかけて各50曲からなる10巻本と、45曲(そのうち1曲は断片)からなる補遺を著したことで知られる。それら445曲の鍵盤ソナタに付けられた番号はロンゴ番号(L番号)と呼ばれ、便宜上かなり浸透したものの、ロンゴの編集方針はきわめて恣意的で、その後大きな問題を残すことになった。音楽学的な観点から詳細な検討を行い、信頼に足る作品番号を提示したのは、1953年に『ドメニコ・スカルラッティ』⁸⁾を著したカークパトリックである。カークパトリックは印刷譜の出版年代や筆写譜の作成年代を手がかりに想定しうる全ての資料を整理し、新たに10曲の鍵盤ソナタを

追加して総数を555曲とした。これは今日カークパトリック番号(K番号)と呼ばれ、ロンゴ番号に代わって広く用いられるようになってきている。ただし、K番号は、資料のテキスト研究に基づくものではない。その後、ペステリは、様式分析に基づいて年代記を試みたが⁹⁾、様式を判定する基準や同一様式内での序列に説得力を欠くという批判から、いまだ一般化する気配はない。1978年から始まったファデーニによる新全集の刊行¹⁰⁾も、新たな年代記を提示するものとして注目されたが、まさに資料が輻輳する1750年以前の鍵盤ソナタを扱う巻で中断したまま今日に至っている。

このような状況から、本研究では楽譜資料を特定する場合、各資料の番号と同時に、K番号を一貫して使用していることをお断りしておきたい。

3 鍵盤ソナタに関する比較資料

今回、ヴェネチア写本の第14巻(1742)にほぼ該当するK.43からK.94までの鍵盤ソナタを検討するにあたり、使用した楽譜資料は次の通りである。なお、これらの楽譜資料に関しては、当該所蔵図書館からマイクロフィルムで入手したものを主に使用したが、ケンブリッジ写本を除いては、現地での資料調査(Wasserzeichen等)を行ったものである。

1 筆写譜

資料1 ヴェネチア写本(V-M)

・Sonate Per / Cembalo. / del Cavaliere D. Domenico / Scarlatti / 1742
(Venecia, Biblioteca Nazionale Marciana 所蔵 MSS 9770)

ヴェネチア写本は全15巻からなり、496曲の鍵盤ソナタが収められている。今回対象とする1742年と記された巻と1749年と記された2巻には、通し番号が付されていない。カークパトリックは、ロンゴに倣い、1742年と記された巻を第14巻、1749年と記された巻を第15巻と呼んでいる。この2巻を除いた13巻には各30曲の鍵盤ソナタが収められているのに対して、第14巻には61曲、第15巻には41曲のソナタが収められており、曲数の点で異なっているばかりか、前回検討したように、筆跡の点でも明らかな相違を見せており、異なるコピストの存在を想定させる。第1巻から第13巻には、1752年から1757年に至る年代が記され、それが写本の作成年代とされている。これらの写本の表紙には、スペインとポルトガルの紋章の組み合わせが革表紙の上に金で型押しされ、色インクで鮮やかに彩色されていることから、マリア・バルバラ王妃のため

<表1>

K番号	V-M (XIV)	P-M	M-M	Co-M	L31553-M	Ca13-M
43	1	III-7			XIII	
44	2	II-20	III-68		IVX	18a
45	3					
46	4	II-15	III-13		XXXIV	
47	5	III-11			XVIII	
48	6	II-24			XXIX	
49	7/II-12	III-5			XI	
50	8	III-22	III-21		XXXVIII	
51	9					19a
52	10					
53	11	VI-13	III-69		XVI	
54	12	III-20	V-57		XII	22a
55	13	III-1	III-67		V	
56	14	II-25			XXII	
57	15	III-12			XX	
60	19		V-40a			
68	30				XXXX	
69	32	II-27	V-23			
78	44			3		
82	47			2		
85	50			1		
87	52	II-28				
94				4		
96	Boivin	III-29			XXXIII	

筆写譜の相互関係

に作成された最も重要な写本とみなされている。

資料2 パルマ写本 (P-M)

- ・ Libro I
- ・ Scarlatti. /Libro 2 / Ano de 1752
- ・ Libro 3
(Parma, Biblioteka Palatina, Sezione Musicale Conservatorio Arigo Boito 所蔵 AG31406-31450)

パルマ写本は全15巻からなり、463曲の鍵盤ソナタが収められている。ヴェネチア写本よりも曲の総数は少ないが、ヴェネチア写本に含まれない曲が19曲あり、その中の2曲は他のどの資料にもみられない。ヴェネチア写本のK.43からK.94で、パルマ写本と重複する鍵盤ソナタは<表1>の通りであるが、これらは第II巻から第VI巻までの間に、無秩序に散在している。第1巻と第6巻には年代が記されていないが、その他の巻には1752年と記されている。この写本もマリア・バルバラのため、あるいはスペイン宮廷に仕えていたファリネッリのために作成されたとも言われているが定かではない。ボイドによれば、ファリネッリが1759年にスペインを去る時、ヴェネチア写本と共にイタリアへ持ち帰ったとされている。¹¹⁾

資料3 ミュンスター写本 (M-M)

- ・ Sonate per Cembalo / del Sig.r / D. Domenico Scarlatti.

- ・ Sonate per Cembalo del Sig.r D. Domenico Scarlatti
- ・ Sonate / DEL Sig.r D.n / Domenico Scarlatti /1754
(Münster, Santinische Bibliothek 所蔵 Sant. 3966—3968)

F. ザンティーニ修道院長 (1778-1862) が所有した写本で、全5巻から成り、352曲を含んでいる。

今回の対象曲では、14曲がヴェネチア写本と重複し、7曲がパルマ写本と重複している。シェヴェロフによれば、ミュンスター写本の原本としてパルマ写本を挙げているが¹²⁾、写本全体ではパルマ写本には見られない3曲のソナタを新たに含んでいる点が注目される。

資料4 コインブラ写本 (Co-M)

- ・ Toccatà -10. Del Sigr : Doming Escarlate
(Biblioteca da Universidade de Coimbra 所蔵)

上記の筆写譜は、C. セイシャスの「30のトッカータ集」の最後に収められているもので、確かな作成年代は明らかではない。セイシャスの研究者カストナーによれば、この写本は1720年代に筆写されたものとしている。スカルラッティの初期の作品とみなされる多楽章による作品群の一つで、K.85, K.82, K.78a, K.94の4曲から構成されている。前の3曲はヴェネチ

ア写本に重複しているが、K.94はこの写本にしかみられない。第1楽章と第2楽章の間には *Seque Fuga* と表記され、第4楽章の終わりには、*Fine* と記されている。数ある写本の中で、スカルラッティのポルトガル時代の作品を想定させる唯一の写本である。

資料5 ロンドン31553写本 (L31553-M)

(British Museum 所蔵)

- LIBRO DE XLIV. SONATAS, MODER-/KAS, PARA CLAVICORDIO. COMPUESTAS, /PORELS ENOR D.DOMENICO SCARLATI, CABALLERO DEL ORDEN DE SANTIAGO, Y MAESTRO DE LOS REYES CATHOLICOS, D.FERDINANDO EL, VI DONA MARIA BARBARA.

標題が示す通りスペインで作成された写本である。J. ヴォーガンの所有を経て、今日 British Museum に所蔵されている。途中、J. ヴォーガンが C. ウェスレイに寄贈したとの説もある (注13)。K 番号の43から144に至る比較的初期の鍵盤ソナタが、44曲収められている。

資料6 ケンブリッジ13写本 (Ca13-M)

(Fitzwilliam Museum 所蔵 32F13)

- Libro de Sonatas de Clave Para el exmo. S. or Enbaxado de Benecia. De Dn. Domingo Scarlati.

ケンブリッジの Fitzwilliam Museum には、スカルラッティの鍵盤ソナタを含む2巻の写本 (32F12, 32F13) がある。イギリスの楽譜蒐集家 Richard Fitzwilliam が1772年にマドリッドに赴き入手したもので、ケンブリッジ13写本はそのうちの1巻に該当する。表題からも伺えるように、ヴェネチアの大使のために写譜されたものと思われる。ケンブリッジ12写本が、K 番号の後半を多く収めているのに対して、ケンブリッジ13写本には、K 番号の若いソナタが多く、4曲は《Essercici》にも含まれている。この写本には、他の写本には見られない5aと7a (K.145と K.146) が含まれている点で注目される。

今回比較の対象とする上記5種類の楽譜資料に関して、重複する相互の関係を K 番号によって整理すると <表1>の通りとなる。

4 筆写譜の比較

次に、各写本の特徴を知るために、これまでと同じ方法を用いて、記譜上の細かな相違を比較してみたい。

なお、楽譜上での位置の特定に関する省略記号については、記譜の状況に合わせて、Sはソプラノ声部、Bはバス声部を、上または下は大譜表の上段もしくは下段を、音は音符、休は休符を表す。また、欠は欠落を示し、音名はドイツ音名を用いた。C-D-Eは水平的旋律進行を示し、C-E-Gは垂直的和音の構成音を示している。

(1) パルマ写本とヴェネチア写本

小節	場所	P-M	V-M		
K43					
冒頭	S 3	F	Fis (#)		
8	上 1~2	スラー	欠		
8	6~10	16分音	32分音	V=L	
9	7~10	16分音	32分音	V=L	
23	上 1~2	8分音	16分音	V=L	
23	中 2~3	8分音	16分音		
26	下 8~9	16分音	32分音		
26	上 9~10	16分音	32分音		
28	下 2~3	16分音	32分音		
28	上 3~5	16分音	32分音		
30	下 3	8分音	16分音		
30	下 4~5	16分音	32分音	V=L	
31	中 3	8分音	16分音		
31	中 2~3	16分音	32分音		
K47					
2	S 1	欠	tr.	V=L	
2				V=L	
7	上 4	16分音	32分音		
14	中 8	Des	D (b 欠)	V=L	
15	T 3~5	E-F-G-F	欠	V/L	
18	T 1	Des	D (b 欠)		
18	S 6	A	C		
31	A 1	欠	A	V=L	
全半終		欠	Volti	V=L	
39	B 1	F	欠	V=L	
51	内 1	欠	A (16分音)	V=L	
65~66		S 1	タイ	欠	
終止		欠	D.C.		
K48					
4	S 2	B	H (h)		
8	内 2	A	As (b)	V=L	
21	上 3 連符	16分音	32分音	V=L	
26	下 1~3	E-G-As	欠		

48	下 2	D	E	(2)ヴェネチア写本とコインブラ写本			
48	中 2	Fis	欠	小節 場所	V-M	Coim-M	
49	上 1~2	16分音	8分音	K78			
K56				冒頭	欠	Allo.	
冒頭	Allegro	欠		調子記号	欠	b 2つ	
7	内 7~8	タイ	欠	9	上 1~5		
8	内 4~6	F-Es-D	欠	10	上 1~5		
9	内 4~6	D-C-B	欠				
19	内 2	D(附点 4分音)	欠				
30	S 1	mor.	欠	9	下 1	Tr. 欠	
前半終	欠		Volti	10	下 1	Tr. 欠	
31	B 1	G(附点 4分音)	欠	11	下 1	G F	
41	S 1	G	E	15	上 4	D G	
43	B 1	C(附点 4分音)	欠	18	小節	欠	
49	S 1	E(4分音)	欠	22	上 1	欠 モル	
49	A 3	H	欠	22	上 1	H bつき B	
53	S 5	E	F	11	上 3, 6	A G	
最後	Fin		D.C.	14	上 4~8	}	
K57				30	上 4~8		
46	S 1	mor.	欠	32	上 1~5		
58	S 3	欠	mor.	34	上 1~5		
65	内 2~3	F-A	欠	36	上 1~5		
前半終	Vtito	欠		38	上 1~5		
105	上 6	F	G	40	上 4~9		
106	下 1	B-F	欠	35	上 2	A C	
139	S 1	E	Es(b付)	38	中 2	C 欠	
175	B 3	F	D	40	下 1	C E	
181	下 1~3	Es-F-F	欠	41	B 1~2	B-C(4分) 欠	
最後	欠		D.C.	41	上 4	G C	
K69				43	F 1	F F(1 Oct. 下)	
音部記号	ハ, ト, ハ音混合	大譜表					
4	T 2	A	欠	K82			
5	内 4	Des(b)	D	冒頭	欠	Fuga	
16	A 1	G	欠	5	上 5	B(b) H	
24	B 1	h	b	6	上 3	B H	
30	T 1	C	B	7	上 1	B H	
43	B 3	B	As	9	上 1	B H	
46	下 1	F	欠	23	中 3	E 欠	
最後	欠		D.C.	24	中 1	F 欠	
K87				30	S 2	C 欠	
音部記号	ハ, ト, ハ音混合	大譜表		30	中 3		
11	内 3	F	欠	31			
17	A 1	D	欠				
21	B 2	E	欠				
21	内 5	D	欠				
37	S 1	D	欠	34	S 2	G C	
37~38S	タイ	欠		42	F 1~3	欠 B-A-G(1 Oct 下)	
44	T 2	A(8分音)	A(4分音)	43	S 2	C F	
44	T 3	H	欠	43	下 1	A F	
最後	欠		D.C.P	48	下 2	F A	

49	下1~3	欠	D-D-D(1 Oct 下)	174	上3	B(b)	H
50	下1~3	欠	F-F-F(1 Oct 下)	189	下1	E	C(Oct.)
51	下1~3	欠	A-A-A	189	S2	F	A
58	下2	A	F	190-192	下2-3	B-C	B-C(1 Oct. 上)
59	中1	欠	H	193	下1	F	1 Oct. 上
61	中1	欠	A	194	下1	16分休	F(16分音)
63	中1	欠	Gis	195	全体		欠落
64	中1~3	欠	A-A-A	196		F	1 Oct. 下
65	中1~3	欠	C-C-C				
67	下3	欠	#つき Gis	K85			
76	中1						Tocata 10
77	中2			調号	欠		b 1
78				速度標示	欠		Allegro
79				2	下	F(4分音タイ)	F(2分音 Oct.)
		(V-M)		3	下1拍	F	<u>F-C</u> (Cは2分音)
					下2拍	C	E
					下3拍	F	<u>F(1Oct.上)C(2分音)</u>
		(Coim-M)			下4拍	8分休	F
				5	上8	E	G
83	中2	G	C	7	下1拍	C	C(1 Oct. 上)
84	S1	tr.	欠		2拍	F	B(b)
87	中1	欠	A		3拍	B(b)	B(1 Oct. 上)
90	中S	Gis(#)	欠		4拍	C	C(1 Oct. 上)
92	下1~3	C-C-C	C(Oct. 附点4分)	8	下1拍	F(附4分音)	F-C(4分音1Oct.上)
93	上1	<u>G-B</u>	<u>D-G-B</u>	8	下2	F(8分休)	欠
94	下1~3	C-C-C	C(Oct. 附点4分)	9	下10	F	Fis(#)
95	中1	<u>F-A</u>	<u>C-F-A</u>	10	下7	8分休	C-C(4分音)
96	下1~3	B-B-B	B(Oct. 附点4分)		下8	C(8分音)	欠
98	下1~3	A-A-A	A(Oct. 附点4分)	11	下1,2	H-G	H-G(Oct.)
99	上1	<u>D-F</u>	<u>A-D-F</u>		下5	G	G(Oct.)
99~101	下1~3	単音	Oct.	14	下1拍	G	G(Oct.)
102	S1~3	Fis-D-A	Fis-A-D		下2拍	C	G
104	下1	B(b)	H		下3拍	F	F(Oct.)
110	S2	E	Es(b付)		下4拍	G(4分音)	G-G(8分音)
113	中5	B(b)	H	15	下1拍	C	C-C(Oct.)
117	下1~3	G-B-G	Oct. 上	15	上9	Cis(#)	C
121	下1~3	G-A-B	Oct. 上	16	下3拍	A	A(1 Oct. 上)
126	中3	C	D		4拍	A	A(1 Oct. 下)
	中5	C	E	17	下1~4	F-Cis-D-E	1 Oct. 上
128	下1~3	C-F-C	E-C-E	18	下9	Fis(#)	F
130	下1~3	C-E-C	E-C-E	19	上1~2拍	D-E-Fis-G	1 Oct 上
131	上1	F	欠	20	下2	8分休	B(4分音)
135	下5,6	Fis(#)	F	21	下1	C(附4分音)	C-C(4分音)
	S2-3	G-A	E-F	24	下2~4	G-C-D	D-C(1 Oct. 上)-D
136	中2-3	A-G	欠	25	下1	G	G(1 Oct. 上)
137	下1-3	A-H-Cis(単)	Oct.	27	下4	Fis(#)	F
137	中4,6	G	E	31	下1~3	H-A-G	1 Oct. 下
139,141	下1-3	A-Cis-A	Oct. 下		下4	C	G
159	上2,4,6	B	A	32	F1	F	1 Oct. 下
168-170	上1	tr.	欠	33	上10,12	A(16分音)	C

	下 9,10	A-F	1 Oct. 下	38	下 1. 2	G-C	A-A
34	下 5	C	1 Oct. 下	43	下 1	C	1 Oct. 下
	下 6	C(16分音)	16分休				
35	下 2	8分休	4分音	44~50	この7小節については、次の譜例を参照されたい。		
36	下 1	D	1 Oct. 下				
37	下 6~9	E-D-C-H	16分休 -E-Fis-Gis			Fini	Seque Fuga

< ヴェネチア写本 >
(Biblioteca Nazionale
Marciana 所蔵)

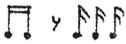


< コimbra写本 >
(Biblioteca da Unicersidade
de Coimbra 所蔵)



K94			23	上 1・2		
	この曲については、他のいかなる筆写譜、印刷譜にも見られないもので、比較の対象を持たない。		26	下 9・10		
			26	上10・11		
(2)パルマ写本とロンドン31553写本			28	上 4 拍目		
小節 場所	P-M	L-M	30	下 3 拍目		
K43			31	下 2 拍目		
冒頭	Allegrissimo	Allegro	38	中 3 拍目	A-G	欠
1			39	下 2 拍目		
8	中 6~9		41	中 2 拍目	A-G-Fis	欠
9	同上			全体		
10	同上					
11	同上					
12	同上					
			K44			
			11	上 1 拍目		

10	上3,4	G-F	A-G	40内4	Gis	G(#欠)
23	A3	㇗つき H	C	41~42内	A(タイ)	A-A(タイ欠)
43	S2	16分(装)	欠	50下	A-C-D-E(Oct)	欠
44		同上		53内1~3	F-E-D	欠
47		同上		54内2	D	欠
45	中1	C	B	57下4	Gis	G(#欠)
47	S3	㇗つき As	A			Fin.
68	B3	G	C			
69	上3,4	<u>E-G</u>	<u>G-E</u>	4)ヴェネチア写本とケンブリッジ13写本		
79	上4	C	E		VM	Cam13
85	上5			K51		
90	中1	F	欠	4 S1	G	欠
92	S4	As(b)	A	4 S3	G	欠
93	S6	Es(b)	㇗つき E	5 S3	D	欠
102	下5	Es(b)	Es	11 S4	Es(b)	E(㇗)
110	A3拍	F	欠	11 S6	Des(b)	D
137	<u>A1,2</u>	タイ	欠	11 S9	装(32音)	装16音斜)
137	<u>TB2~4</u>	A-F-C	F-C-A	12 S5	装(32音)	装(8音斜)
140	B3	F	E	12 S9	H	A
152	S3	2拍装飾音	1拍装飾音	12 S10	装(32音)	欠
最後		フェルマータ	Fin	12 S15	装(32音)	欠
				15 B8	F	G
K54				17 S1	D	欠
3上2	タイ	欠		18 A2拍	E	C
3上4	<u>H-D</u>	<u>C-E</u>		18 S4拍	A	C
4上1	<u>H-D</u>	<u>C-E</u>		19 S4拍	A	C
4内7	A	欠		20 S1	B	A
10S2,3	Gis-E	A-Gis		21 S1~4	D-B-G-Es	C-B-C-A
11内4	Dis	D(#欠)		28 S4	E(㇗)	Esに#(E:古い記譜)
12内4	Dis	D(#欠)		28 S16	E(㇗)	㇗なし(Es)
6	Fis	F(#欠)		38 S5	装(32音)	装(8音斜)
13S7	mor.	欠		S10	同上	同上
14S5	mor.	欠		38 S7	Ges(b)	㇗なし(G)
15	3,4拍	欠		39 S1	装(32音)	装(8音斜)
17~19	3小節	欠落		S6	同上	同上
20内1	Dis	欠		37 内1	Des(8分音)	欠
22内1	E	欠		39 S16	装(32音)	装(8音)
23上6	Gis(Oct)	G(#欠)		39 S18	Des(b)	㇗なしD
24内1	E	D		40 S2	Ces(b)	C
26内2~4	E-Dis-E	欠		40 S4	Ges(b)	G
27 小節全体スラー		欠		40 S7	装(32音)	欠
27内5	Gis	G(#欠)		40 内5,6	16音	8音
前半終		Zri.Pro		42 内4拍	F(4分)	欠
28内5	Gis	G(#欠)		42 B7,8	D-B	C-F
31S1~2	タイ	欠		43 B1	Es	B
31内1	F(附点2音)	F(附点4音)-D		43 内6	D(4分音)	欠
33S7	C	Cis(#)		43 B7,8	D-B	C-F
39S5	Gis	G(#欠)		44 内6	D	欠
39内4	Gis	G(#欠)		45 内3	D(16分音)	欠
40内2	E	F		45 B2	As(b)	A

45	S4	同上	
46	内1~4		
46	B6	As(b)	A
46	内11,12	8分音	16分音
46	S12	As(b)	A
46	S17	装(32音)	装(8音斜)
	最後	D.C.	Fin

5 資料の総合的考察

これまで写本の細部の比較を通して見てきたように、各写本間で生じた相違現象は、音の相違（音高、リズムなど）から、特定のパッセージや小節の欠落あるいは相違、調子記号や樂想標示の違いなどに至るまで、きわめて多岐にわたって観察される。これらの相違をこれまでと同様に、その要因から大きく2つのレベルに大別する。第1のレベルは、コピストが無意識に犯してしまう不注意によるミスで、コピストの行為に主体性は見られない。例えば、音高や臨時記号の単純な書き間違い、複雑な箇所や反復の読み違いに起因する書き間違いなどは、コピストの不注意によって生ずる典型的な事例である。第2のレベルは、明らかに音楽的意図を異にするもので、異なる原本を想定させる相違である。例えば、樂想標語、拍子記号、調子記号、特定部分の内容的な相違、小さな相違箇所の拡大などである。これらの2つの根本的相違のほかに、写本にはコピストの教養や癖が必ず反映される。これを第3のレベルと呼んでおきたい。例えば、臨時記号、装飾音、休符、などの記譜上の特徴で、コピストの主観的な側面の現れであると同時に、特定のコピストに共通して現われる一貫性でもある。特に18世紀中頃は、記譜のスタイルが変化する過渡期にあり、コピストの特徴が強く写本に反映されることが少なくない。特に調子記号の数については、コインブラ写本の一部を除き、全ての写本で今日より1つ少なく記譜されている。これは写譜の忠実さを示すというより、当時の習慣によるものであろう。これらが音楽的内容に直接影響を及ぼすことは少ないが、コピストの特徴を知る上で貴重な手がかりとなる。

次に上記の2つのレベルを尺度にして、写本相互の相違を整理すると〈表2〉のようになる。表中のA、Bは、第1と第2のレベルで、原本が明らかに相違することを示している。A、A'は、第1レベル内での相違で、相互に違いがあるが、きわめて共通性の高いもので、ダッシュは相互の派生関係を示している。なお、K番号の後のかっこ内は調性を、各筆写譜の後のかっこ内は調子記号の数を示している。

まず、スカラッティの写本の中で第1次資料とされるヴェネチア写本とパルマ写本の関係について見てみよう。過去の文献を振り返ってみると、ロンゴ、ギルバート、カークパトリックなど多くの研究者たちがヴェネチア写本を主要写本と考えてきた。一方、シェヴェロフは、全く逆の立場をとり、ヴェネチア写本はパルマ写本と失われた資料から写譜されたと推測している（注12）。今回の筆者のテキスト比較からは、ヴェネチア写本の14巻に関する限り、14曲中4曲（K.46, K.53, K.54, K.55）を除いて、ヴェネチア写本にはパルマ写本を超える情報は含まれておらず、パルマ写本、あるいはその他の原本から写譜された可能性が高いことが判明した。音の欠落、音高の相違など、第1レベルの相違で、リズム、装飾音、臨時記号の表記、各種音部記号の使用などから生じる不一致は、コピストの記譜習慣や教養を反映するものである。AとBの関係にある4曲は、樂想標示や拍子記号が異なるもので、異なる原本からの筆写が考えられる。

ミュンスター写本については、パルマ写本との近似性がきわめて高いが、K.53やK.54のように、拍子記号が異なったり、両写本にはない新たな情報が付加されているものも、ミュンスター写本は、必ずしもパルマ写本の忠実なコピーとは考えられない。

コインブラ写本はヴェネチア写本とのみ重複しており、K.94はこの写本でしか見られない。コインブラ写本ではハ音記号が多用され、記譜の形態はヴェネチア写本よりも古い。コインブラ写本では、4曲は多楽章ソナタとして書かれており（K.85,82,78,94）、トッカータ10番と記されているが、ヴェネチア写本では、独立した曲として写譜されている。音高上の相違は著しいが、両者の大きな相違はオクターヴ関係での音の上下やリズムの複雑化であり、コインブラ写本はヴェネチア写本のスケッチ的存在ではないかと考えられる。しかし、ヴェネチア写本では、記譜に際して1つ少ない調号を用いる習慣から、K.78やK.85では、臨時記号を落とした単純な記譜ミスが目立つ。

ロンドン31553写本は、ヴェネチア写本ときわめて近似関係にあるが、ヴェネチア写本のミスを引き継ぐことはない。しかし、音の欠落や音高相違など新たなミスが発生している。リズムの表記には独自性がある一方、異なる筆跡による加筆も散見され、筆写時期の特定が難しい。

ケンブリッジ13写本は、コピストの誠意が全く感じられない写本である。音部記号や調子記号は冒頭に1回記されるのみで、筆致も殴り書きに近い。他の写本が、前半や後半を頁内に収めて記しているのに対して、頁の途中で始まるものもあって、奏者への配慮は全くなれていない。音の欠落や音高の相違

<表2>

K番号	V-M (XIV)	P-M	M-M	Co-M	L31553-M	Ca13-M
43 (g)	A' (1b)	A (1b)			A" (1b)	
44 (F)	A' (1b)	A (1b)	A''' (1b)		A" (1b)	B (1b)
46 (E)	B (3#)	A (3#)	A' (3#)		B' (3#)	
47 (B)	A' (1b)	A (1b)			B (1b)	
48 (c)	A' (2b)	A (2b)			B (2b)	
49 (C)	A (なし)	A (なし)			B (なし)	
50 (f)	A' (3b))	A (3b)	A" (3b)		A''' (3b)	
51 (Es)	A (2b)					B (2b)
53 (D)	B (2#)	A (2#)	C (2#)		A' (2#)	
54 (a)	A (なし)	B (なし)	C (なし)		B' (なし)	B (なし)
55 (G)	A (1#)	B (1#)	B' (1#)		B' (1#)	
56 (c)	A' (2b)	A (2b)			B (2b)	
57 (B)	A' (1b)	A (1b)			A" (1b)	
60 (g)	B (1b)		A (1b)			
68 (Es)	A (2b)				B (2b)	
69 (f)	A' (3b)	A (3b)	A" (3b)			
78 (F)	B (なし)			A (1b)		
82 (F)	B (なし)			A (なし)		
85 (F)	B (なし)			A (1b)		
87 (h)	A' (2#)	A (2#)				
94 (F)				A (1b)		
96 (D)		A (2#)			B (2#)	

筆写譜の影響関係

のみならず、数小節にわたる脱落も珍しくない。オリジナルから遠く距離を置いた写本といっても過言ではない。

おわりに

今回は、ヴェネチア写本の第14巻に該当する K.43 から K.97までの6種類の筆写譜について比較考察した。写本によっては一部分しか該当しないものもあるので、写本間の伝承関係について、早急に結論を出すことは避けたいが、パルマ写本を失われた原本に近いきわめて重要な写本として確認することができた。前回は、ヴェネチア写本とパルマ写本のコピー、筆跡、ラストラル、ウォーターマーク等を中心に検討したが、それらを含めて総合的展望を行うためには、残された楽譜資料の比較を辛抱強く続ける必要があると思われる。それに加えて作品の様式上の諸問題やマリア・バルバラをめぐる資料の成立事情も重要な鍵を握ってくるものと考えられる。テキストの比較研究から、資料伝承の系譜をたどる試みは、同時に多様な楽譜による受容の実態を通して、新たなコンテキストを発見する試みでもある。その意味で、楽譜は単なる音を記録したメディアではなく、その楽譜を必要とした社会を映し出す鏡でもある。

注および参考文献

- 1) 小林義武『バッハ－伝承の謎を追う』春秋社、1995、p.24.
- 2) 拙稿「ドメニコ・スカルラッティの鍵盤ソナタに関する資料の比較研究 - K1からK30までを中心に-」『エリザベト音楽大学紀要』VIII 1988、pp.31-52.
- 3) 拙稿「ドメニコ・スカルラッティの鍵盤ソナタに関する資料の比較研究 - K31からK42までの印刷譜を中心に-」『エリザベト音楽大学紀要』XIII 1993、pp.13-27.
- 4) C. Hopkinson, "Eighteenth-century Editions of the Keyboard Compositions of Domenico Scarlatti", *Edinburgh Bibliographical Society Transactions*, Vol. III, Part I(1948-1949), pp.47-71.
R. Kirkpatrick, "Domenico Scarlatti", Princeton, Princeton University Press, 1953, p.407.
L. Sheveloff, "The Keyboard Music of DOMENICO SCARLATTI", Ph.D. Dissertation. Brandeis University, 1970.(Xerox Copy. Ann Arbor, University Microfilms) Vol. 1 p.214.
- 5) 拙稿「ドメニコ・スカルラッティの鍵盤ソナタに関する資料の比較研究 - K43からK147までのヴェネチア写本とパルマ写本を中心に-」『エリザベト音楽大学紀要』XIX 創立50周年記念号(依嘱論文) 1998、pp.13-33.
- 6) 拙稿「ドメニコ・スカルラッティの初期の印刷譜 - 南葵音楽文庫所蔵の鍵盤曲集を中心に

－」『広島大学学校教育学部紀要』第Ⅱ部 第10巻 1987, pp.143-151.

拙稿「ドメニコ・スカルラッティの鍵盤ソナタに関する資料の比較研究 －三つの新スペイン写本を中心に－」『広島大学教育学部紀要』第Ⅱ部（文化教育開発関連領域）第49号 2000, pp.351-358.

筆者は、1992年、文部科学省の在外研究員としてカーディフのウェールズ大学にボイド教授を訪ねたが、その後、イベリア半島の全図書館、修道院等の調査を担当された教授のご好意により、スペインとポルトガルにおける最新の情報と資料の提供を受けることができた。それらの資料に関する紹介と比較考察については、第235回日本音楽学会関西支部例会で口頭発表した。

7) A. Longo(ed.), "SCARLATTI OPERA

COMPLETE PER CLAVICEMBALO", Milano, Ricordi, 10vols. & Supplemento., 1906-1910.

8) R. Kirkpatrick, "Domenico Scarlatti." Princeton, Princeton University Press, 1953.

9) G. Pestelli, "Le Sonate di Domenico Scarlatti, Proposta di un ordinamento cronologico", 1967.

なお、様式分析に基づくペステッリの年代記は、ペステッリ番号と呼ばれている。

10) E. Fadini(ed), "Domenico Scarlatti Sonate per Clavicembalo", Milano, Ricordi 1978-

11) M. Boyd, "DOMENICO Scarlatti, Master of Music", London, Weidenfeld and Nicolson, 1986, p.148.

12) J. L. Sheveloff, op.cit., Vol. 1, p.50.

13) J. L. Sheveloff, op. cit. Vol. 1, p.90.